

ら、うちの公民館ではそれができるので、他の公民館ではそれができないみたいな感じで。

やはり、どうしても属人性というか、その人がいるからみたいなところで、その人の頑張りとか我慢によって持続できてしまうというところもあるなというようになります。

土肥さんが言われた、今のその価格交渉は未来への……というようなお話が、本当にその通りだなと思っています。

ちらつと土肥さんのXを見たのですけど、その通りだというように思つて見ていました。これからを作つていく我々世代だからこそ、そういうところにはちゃんと意識も向けないといけないし、そこを綺麗事というか、ごまかしてきましたところがあると思っていて、これは社会教育だから、自分たちで、手弁当で頑張るのが全てにおいていいのだというような風潮が少なからずあつたのではないかと思うので。

もちろん、それは大事だし、そこを全否定するわけではないけど、自分たちで、手弁当で頑張っていますという美しさと、持続可能性としてのお金の問題は両立しうると思うので、なんかそこをもう

ちょっと正面から捉えていかないといけないのでないかと思います。

萩元：難しい話題でしたが、めちゃくちやいい話になりました。まちづくりは、未来の世代に対する預かりものであると私は考えています。我々の世代が次の世代に、次の世代に、贈り物をどう届けていくかというところに、今、土肥さんと藤原さんがおっしゃったことをまさにそれぞの課題として実践して、みんなでやつていかなきやいけないなと思いました。

土肥さんのnoteとかXの話も重要な

だなと思つていて、藤原さんは感じいらっしゃると思うんですけど、社会教育業界全体の社会への訴求力が異常に弱くないですか。

藤原：すごく弱いです。いや弱いと言つたらちょっとあれですけど、あんまり強くないですよね。

萩元：そもそも発信している人がそんなにないし、けつこうクローズドな情報とかが多かつたりとかして。例えばnoteで「社会教育」を検索してもあんまりタグがついてないのです。

土肥さんは、本当にソーシャルな視点で、分野やジャンルにとらわれずにやつ

ていらつしやると思うのですけど、その情報発信とかそういうことに限らず、全体的に行政が取り組むものと、情報発信はすごく弱いなとは思います。

プロセスに面白さがあると思うので、そのプロセスをちゃんと発信するということもすごく大切なと思っています。

行政とのコミュニケーションと、たぶん行政の中では、例えば、市民から何か要望があつた時に、それをどう受け答えをするかといったことは、かなり協議をしていると思うんです。

その間の葛藤はちゃんとコミュニケーションされていなかつたり、中で「もんでもん」やつと回答が出てきたら、「検討します」だけといった感じで。実は、その「検討します」の間に、いろんな議論があつたと思うんですよ。

そういうものがもつと公開された方が、みんなも共感できるし、仲間になるみたいのはあるのかなと思つたりします。

あとは、情報発信とか、見せ方みたいなどころで言うと、新しく社会教育士というのもできたりしてはいるんですけど

特別企画：社会教育の未来を語る
～社会教育にイノベーションを起こそう！～

ど、結局、さきほどの仕事の話にも繋がるのですが、その人たちがちゃんと食えるかみたいなことが、明確になつていかないで、資格だけになつてしまふと思うので、そこはやはり、セットで考えられた方がいいよなとは思つたりはします。

テーマ6 社会教育士という「称号制度」をどう生かす？ SNSの活用次第？

萩元：そうですね。社会教育業界的には、社会教育士という制度ができた2020

年から大波が来ていて、その大波ももうあと数年で終わつてしまふくらいの危機感を私は持つていて、かなり現状を危惧しています。

なぜなら、人数が増えれば増えるほど、「それで稼げない」とか「活躍できない」とか、そういう質の面とかリアルな生活の面で「ボロが出てくる」のではないかと思っています。

だからこそ、プロフェッショナルな社会教育士の皆さん、そして活躍する場、そういう事例をどんどん増やしていくといけないと。社会教育業界全体的にピンチだよということはすごく考えていました。

あと、土肥さんのnoteには、15

00くらいのフォロワーがいらっしゃる。ちなみに僕も千数百いるのですけど、土肥さんの発信力すごいなと思つて見てます。藤原さんはSNSで何をされていますか？

藤原：自分は本当にInstagramとかぐらいたしかやつてなくて、情報の見せ方というところで言うと、本当に自分はソーシャルというよりも本当にローカルでしか見てなかつたなど、今、すごく反省しています。

KEYSの情報発信も、どうしても対象が小学生、中学生、その保護者さんと

かになると、公民館便りに載せます、小学校、中学校にお便りとして配ります、回観板に載せて全校配布しますみたいなことをすると、それで概ね住んでいる人たちには伝わるし、対象の人たちには伝わるからいいかとなつて、あまり大き的に外に出さないというところがあつて、これもあまり良くなかつたなと思つています。

どうしても地域に根付いた活動だと、根付きすぎて、社会に出ていかないところがあるなど今感じました。

萩元：ありますよね。もちろん、その気持ちもわかります。藤原さんがされてい

ることは、社会のためになるというところもあつて、その社会の反応を得ることで、藤原さんの活動がさらに良くなるという循環を、ぜひ我々の世代で着実に広げていきたいなど強く思います。

藤原：そうですね。若い人はやはり、インスタばかりですね。初めて会つて交換するのがLINEじゃなくて、インスタを交換すると、その人が投稿している内容で、その人がどういうものが好きで、どういうことを普段考えているのか、どういうところに行つているのかというのがわかるから。

LINEで会話してお互いのことを知るよりも手つ取り早いというところがあるのかなとに個人的には感じています。

萩元：20代の土肥さんがfacebookをされていることがまだヒントだと思うのです。別に土肥さん的にはしなくてもいいかもしれないけれど、他世代とコミュニケーションを取るためにやつてらつしゃるんだと。シニアの人からすると、じやあ若い方とコミュニケーションを取るためにもインスタやるとか。

なんかそういう、相互に断絶しない、コミュニケーションツールがあるといいのにとすごく思います。

土肥：そうですね。普通にその人に合わせたコミュニケーションをしていくということかなとは思います。Facebookは半分もう仕事みたいな感じとか、僕の場合、SNSは全部仕事みたいな感じで、あまりプライベートのためにやるというのはないんですけど。だからといって中高生と繋がるためにインスタやればいいかと。いうと、普通に、政治家とかでも中には若い世代への情報発信でインスタとかをやっているのですけど。

もちろん、そのように努力することは重要だと思うのですが、子ども若者向けの活動をやっている団体とかと、一生懸命インスタを作つて発信したりするのですけど、そもそもインスタではなくても、普通に中学生とか高校生と繋がるのだつたら、学校に行つて説明した方が全然手っ取り早いみたいな気もするので、無意味にいろんなアカウントがどんどん増えていくということが本当に必要なのかどうかというのは、時に思つたりしますけどね。

テーマ7 社会教育の未来とは

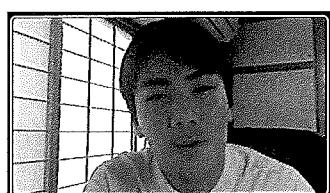
萩元・社会教育活動に強い想いを持ちつつも社会教育という表現・発信をあまり

同時に質の



萩元直樹さん

リスティナブルタウン
代表理事
萩元直樹
Naoko HAGIWARA



藤原睦己さん

問題というところで大きな危機感も持つていて、なんとしても今すぐみんなで専門性を高め合つて、社会教育ゴリゴリじゃなくて、藤原さんや土肥さんのようにナチュラルに社会や教育に接していくよな、そういう存在になればなと今強く思っています。

私は、社会教育士という人たちは、学びの視点で社会に向き合うロールモデルだと思っています。社会教育士の一人一人のいろんな越境の活動、新しいやり方、そういうたとこからすごくヒントもらえて、そういうたった社会の向き合い方もあるのだと、本当に勉強になる人たちだなと思つています。そういう人たちがもつともっと広がつて、様々なコミュニティや組織に当たり前にいる。そんな社会。例えば、いろんなプロジェクトの時に社会教育士の方が一人いるだけでその場が変わつていくぐらいになるまで、専門性をしつかり高め

やはり、日頃中学生とか高校生と接しているたり、自分が高校生だった時のことを考えると、ひとつずつ主体として地域は受け入れてくれていたのが大きかつたのではないかなど思つていて。

だから、老いも若きも、みんな1人1人が主体として、自分たちの社会のことを考えていくというのが、これから社会教育というか、これから社会を良く

いただけまでしようか。

藤原・これから社会教育についてといふところで改めて考えてみると、ぱつと思ひ浮かばなかつたのですけど。

やはり、日頃中学生とか高校生と接していたり、自分が高校生だった時のことを考えると、ひとつずつ主体として地域は受け入れてくれていたのが大きかつたのではないかなと思っていて。

だから、老いも若きも、みんな1人1人が主体として、自分たちの社会のことを考えていくというのが、これから社会教育というか、これから社会を良く

特別企画：社会教育の未来を語る ～社会教育にイノベーションを起こそう！～

するために繋がるのではないかと考えています。

1番最初のところで、土肥さんの話で、市民自治の本質は爆りなのか、本来は手作りで自分たちが主体としてやつてきたものだったのではないかというお話をありました。

若い人がそういうことを考えるのは、ちょっと意識が高くて恥ずかしいのではないか、あんまりそういうことを積極的に言うのは。というような風潮があるのも事実だと思っていて。

そうではなくて、例えば、私みたいな年齢の人たちが真剣に本気で自分たちの住む地域のこととか社会のことについて取り組んでいる、考えている様子を発信していく中で、多分、これから世代にもそういう風に真剣に考えること、取り組むことは面白いし、かつこいいぞとうように思ってもらえるような取組をしていきたいなと思っています。

そうすることで、多分、これから世代が、若い世代も、自分の住む地域や社会について考えて、どんどん行動を移していきます。

土肥 潤也さん
土肥 潤也さん
街のおじさんたちの話とか聞い



土肥潤也さん

土肥…今、昔に比べると、別に昔を知っているわけではないけど、市民活動とか、まちづくり活動とか、そういう地域の自治活動に使える時間が、どんどん減っているのではないかと思うのです。

というのは、PTAとかを見ていても、今、全体的に物価が上がるけど給料上がらないという社会なので、生活的に苦しい人が多くなってくると、自分自身が満たされていないと、なかなか地域のことをしようという発想になつていかないのではないかと思うのです。

そうすると、PTAもめんどうくさい、地域の自治会もめんどうくさいというようになつっていくと、どんどん弱体化していくというのが現状なのかなということを考えると、ある程度は経済性を増していく

くということとも

合わせて考えていかなきゃいけないのではないか、思つてい

ます。

例えば、商店街のおじさんたちの話とか聞いていて、昔はなんとかでやつてなあとかつていうのを聞いているのですが、けつこう補助金「ジャブジャブ」だつたり。冒頭で話したように。

PTAとか自治会とかも、もしかしたらなんかそういう側面があつたのではないかなと思っていて。よくわからないところから使わなければいけない補助金が湧いてくるみたいなこともあつたかなと思うのです。

今は、お金もないし、人もいないし、そのような中でやらなければいけないので、相当難しくなつてきていることを考えると、ちゃんと仕事と半分セットになつていて、ちゃんと仕事と半分セツトになつていて、ある程度はマネタイズをするような方法というのも考えていくといふのがけつこうポイントになつてくるのかなと思います。

今、体験格差のような話とかも子どもたちの間でありますけど、あれも、結局それぞれの家庭の所得によつてさせてあげられる体験が変わつてくるという部分もあつたりもします。

そういう根本の構造をもう少し見直していかないといけないのでないかなと感想です。

だから社会教育の活動とかも、結果、

てはいる、昔はなんとかでやつてなあとかつていうのを聞いているのですが、けつこう補助金「ジャブジャブ」だつたり。冒頭で話したように。

公民館とかつて、高齢者のサークル活動のレンタルスペースみたいになつているのがほとんどです。

その世代が1番余裕があるんです。お金も余裕があるし、時間も余裕があるし。社会的なインフラとしての社会教育といふことをもう少し考えられるといいかなという気はしています。

萩元・本当はお金とか知識、経験、いろんなノウハウとか、あらゆる可能性を秘めているシニア世代。この人たちと一緒に一緒にやつていくかというところですね。

本当にボテンシャルを秘めているのに、本来、求められている機能をしていいる公民館が今の時代すごく少なくなつているというは大きな危惧を感じています。

あと3人で話していく、「まちで愛されるおじさん、嫌われるオヤジ」という本を一緒に書けるんじゃないかなというぐらい、お2人はたくさん経験してきただろうということを感じました。お話の随所に重みを感じる深いご意見を伺えて、とても楽しい時間でした。

まとまりきらない部分もあるんですけども、最後に近藤さんの方からご感想・

コメントいただけますか。

近藤・皆さん、本当に忙しいところ、時間を合わせていただきありがとうございます。最後に、土肥さんの言つた「お金と時間」ですね、その資源をどのように、それぞれの人が使つていくか。意図的に仕掛けいかないと公民館には暇でお金のある人たちが占有して、なかなか子どもがそこに関われない。

2000年に本誌では「子どもと公民館」という連載を1年半、仕掛けたのです。

ですが、途中で終わつてしまつたのは、事例があまり見つからなかつたからなのです。

越境するというか、壁が壊れてうまく混ざついくようなことがおそらく2025年の課題だと思います。

1つだけ付け加えると、本誌は2025年の8月が通巻950号です。戦後ちょうど80年です、8月号で。この雑誌は、終戦から1年経つ前、1946年7月に創刊されているので、もう1回、これからの中、将来予測も変えざるを得ません。

先日も、中教審生涯学習分科会の「社会教育の在り方に関する特別部会」の方でウェルビーニングの話が出ていましたが、そこでの発表を聞いていても、やはり「場づくり」というのが大事で、「自

分と他人と場」をうまく回していくのがウェルビーニングだと京都大学の内田由紀子教授は言つていたのです。

だから、「場」ってどこのかつて考

えると、まさに今日のお話。特に土肥さんがやつている民設公民館、民設図書館や、藤原さんの古い青少年団体ではなくて、自分たちがやるNPOというようなところが、これからより一層大事になつてくると思います。